様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 27 日現在

機関番号：33928
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2011
課題番号：22730453
研究課題名（和文）
多文化間における「かかわり」促進のためのソーシャルワーク支援の方法
研究課題名（英文）
Social work practice for promotion of "relationship" in multicultural environment.
研究代表者
荻野　剛史（OGINO TAKAHITO）
愛知みずほ大学・人間科学部・講師
研究者番号：00410861

研究成果の概要（和文）：本研究は，多文化間における「かかわり」促進のためのソーシャルワーク支援の方法を明らかにすることを目的としている．調査・分析の結果，ベトナム難民に対して，ベトナム難民の近くで，ソーシャルワーカーなど社会福祉における援助観を理解した人が援助を提供することが必要であると指摘した．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine a method of the social work for promotion of "relationship" in multicultural environment. As a result of research and analysis, it was indicated that it is required to provide supports to Vietnamese refugees by the person near them who understands the support view in social welfare, such as a social worker.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
2011 年度	400,000 円	120,000 円	520,000 円
年度			
年度			
年度			
総　計	900,000 円	270,000 円	117,000 円

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：ソーシャルワーク，ベトナム難民，かかわり

１．研究開始当初の背景

（１）問題の所在

1970 年代にベトナム・ラオス・カンボジアから多数の人が難民（インドシナ難民）として近隣諸国に避難してから 30 年以上が経過した．日本にも 1975 年以降多くのインドシナ難民が保護を求めて到着し，現在でも日本で生活している．彼らに対し政府は定住のための援助を行ってきたが，来日から数十年が経った段階でも，彼らの生活に「教育・学習・言葉の問題」「就職・職業の問題」「住宅の問題」「経済的な問題」「法律上の問題」などの問題があることが指摘されている(原口 2001)．これらの問題の要因の一つとして，ベトナム難民が「環境」（本研究では，学校や会社，地域社会の人々など，日々の生活でベトナム難民が接している人々を指す）にアクセスすることの難しさがあると考えられる．これは日本が未だ外国人を受け入れる社会になっておらず，地域で暮らす日本人と外国人がどのような方法で「かかわり」（「文化背景が異なる者同士が，お互いに加害，受苦の関係になる可能性を認識した上で，お

互いに影響を与え合うこと」－本研究における「かかわり」の定義）を深めていくか，この点に関する相互の理解が不十分である，と考えられるからである．この理解の不十分さが続く限り，前述の生活上の問題も存在し続けることになり，両者の「かかわり」を促進させるためのソーシャルワーク支援の実践が求められる．

本研究では滞日インドシナ難民のうち，人口の点でその大多数を占める滞日ベトナム難民を研究対象とする（以下，ベトナム難民と表記する）．前述のとおり，彼らが抱える生活上の問題の存在が明らかになっているにもかかわらず，この問題が研究対象となることは極めて稀であった．またベトナム難民と「環境」との「かかわり」を促進させるためのソーシャルワーク支援に関する先行研究は，筆者のリサーチでは確認することができなかったが，その一方で政府が難民の定住受入の増加を決定するなど，受入に関する理論構築が実践に追いついていないのが現状である．言うまでもなく，定住受入にあたり，住居など物的な支援のみならず，文化の差異に配慮した，難民と「環境」との間の「かかわり」の促進が求められ，この促進のためのソーシャルワーク支援の方法を明らかにすることが必要である．

（２）先行研究の概観

まずベトナム難民と「環境」との関係性に関する研究として，川上(2001)を挙げることができる．ここではベトナム難民が国・行政，地域社会，コミュニティ，家族と相互作用しながら生活を築いていること，国内・海外に在住の家族から大きな影響を受けながら生活していることが指摘されているが，特にベトナム人同胞間の関係性について指摘されており，本研究の関心事であるベトナム難民と「環境」との「かかわり」については，ある一部分との関係性についてのみ指摘されていると指摘できる．また原口(2001)は，滞日インドシナ難民と地域の人々・機関との関係性について「サポート・システムとしての地域の人々・機関」と「支援を要するインドシナ難民」との関係性に焦点化して指摘しており，川上論文同様，ベトナム難民と環境との関係性のうち，サポートを提供する者との関係性に焦点化して指摘されていると指摘できる．

以上，代表的な論文からベトナム難民と「環境」との関係性に関する先行研究を検討したが，これらの先行研究で指摘されている関係性は，ベトナム難民（インドシナ難民）と「環境」との「かかわり」の一部分のみを表しており，またいずれも刊行から相当な期間が経過しており，必ずしも近年のベトナム難民と「環境」との「かかわり」を適切に表しているとは言えない．

次にベトナム難民に対するソーシャルワーク支援に関する先行研究を検討する．日本におけるベトナム難民に対する公的支援の内容やプロセスは荻野(2006)に詳しいが，ベトナム難民に対するソーシャルワークに関する先行研究は，筆者のリサーチの範囲においては確認できなかった．武田(1997)が，ベトナム難民を含む滞日外国人に対するエンパワメントを目指したソーシャルワークの方法として「参加型リサーチ」の必要性を指摘しているが，これは滞日外国人一般に対する支援方法を指摘したものであり，必ずしもベトナム難民に対する特有な支援方法とは言えない．また，難民を含む文化が異なる者に対して必要な援助技術や支援システムに関する研究として，石河(2003)を挙げることができるが，米国での難民支援実践から得られた知見から論じられており，諸条件が異なる日本での支援実践に直接応用することは困難である．

以上「ベトナム難民と『環境』との関係性」と「ベトナム難民に対するソーシャルワーク支援」に関する先行研究を検討した．前者について，部分的な「かかわり」については指摘されているものの，その全体像が明らかになっているとは言えない．また後者は，難民と移民を同一の人口グループとして捉えた上で支援方法を検討している場合が多く，ベトナム難民に求められる支援方法の検討は，ほぼ手付かずであると指摘できる．

２．研究の目的

以上の問題の所在・先行研究の概観を踏まえ，本研究では次の２点を明らかにすることを目的とする．

（１） ベトナム難民と「環境」との「かかわり」のプロセス

ベトナム難民が日本に定住する間における，彼らと「環境」との「かかわり」のプロセスを明らかにする．

（２） 「かかわり」促進のためのソーシャルワーク支援の方法

前項で明らかになったベトナム難民と「環境」との「かかわり」のプロセスにおける課題を明らかにし，両者の「かかわり」を促進させるためのソーシャルワーク支援の方法を明らかにする．

３．研究の方法

本研究では前述した目的のために，次の 2 つの調査を行った（両調査とも，筆者が調査時点において所属していた研究機関の倫理委員会の承認を得て実施した）．

なおベトナム難民の人口は約 8,000 人であり，他の在日外国人と比較した場合多いとは言えないものの，居住地は多様である．前述したとおり，本研究の目的の一つとして「ベトナム難民と『環境』との『かかわり』のプロセス」を明らかにすることがあるが，調査の前提として，ある程度，文化背景が異なる者同士のかかわりがあることが必要である．このため本研究では，そのようなかかわりがあると考えられる，ベトナム難民にとってサポーティブな環境があると推測できる場所を調査対象とした．

（1）「環境」に対する調査

まず，ベトナム難民の「環境」に対する調査を行った．これは次項の調査を進めるにあたり，当該地域がベトナム難民に対してサポーティブな環境となっているか否かを確認することを目的としている．

調査対象者は，A 小地域でベトナム難民に対して，市民団体の主宰者として，民生委員などの公職者として，また一個人として生活上の諸支援を行っている人 6 名である．

インタビューは 2010 年 10 月 23 日から 2011 年 1 月 8 日の間，調査対象者の事務所や自宅，近隣の集会場など，調査対象者が指定する場所で，1 回（1 回のインタビューで聴取しきれなかった場合は複数回）実施した．インタビュー時間は，最長で 3 時間 12 分，最短で 50 分であり，調査対象者の許諾の元，IC レコーダーで録音した．

予め支援に関する事例を用意頂き，事例の概要と支援の具体的な内容について半構造化面接でインタビューを実施した．

インタビュー後，録音したインタビュー内容を筆者が逐語化し，そこから分析対象となる発言を抽出，その部分の「発言内容」と「支援の目的」「支援の方法」を記述した文書を作成し，調査対象者との書面のやり取りにより内容の確認を行った．またインタビューデータは KJ 法（川喜田 1967; 1970）によって処理した．

（2）ベトナム難民に対する調査

次にベトナム難民の来日から定住までにおける「環境」との「かかわり」のプロセスを明らかにするために，ベトナム難民に対するインタビュー調査を行った．調査の対象者は，下記の条件を満たすベトナム難民（ODP[1]により呼び寄せられた家族を含む）である．

- A 小地域に居住していること
- 生産年齢（15～64 歳）時に来日していること

居住地（調査対象地）として A 小地域を選択した理由は，数少ない日本におけるベトナム難民の集住地のひとつであり，ベトナム難民の生活地の典型例として捉えることが可能であり，また前項で述べた調査により，この地域にはベトナム難民にとってサポーティブな環境があると判断できるためである．

また年齢要件を設けたのは，人間関係は一般的に就業をつうじて構築される（せざるを得ない）ためである．なお対象者数の確保のため，例外的に 2 名，15 歳未満の段階で来日した人を含んでいる．実際の選定にあたっては，当初スノーボールサンプリングでの実施を予定していたが，数件の調査を実施後，この方法での実施が困難（紹介を受けることが困難）と判断したため，地域での諸活動をつうじて当該地域に居住するベトナム難民の生活を熟知する人（日本人及びベトナム人）に調査の意図を伝え，適任者を紹介頂いた．

調査は，2011 年 2 月 20 日から同年 8 月 14 日までの間に行った．インタビューは 30 歳代から 50 歳代の男性 9 名，女性 5 名，計 14 名のベトナム難民に実施した．しかし，うち 3 名についてはインタビューの段階で，後述する「重要な他者」に限らず，日本人とのかかわりが「ない」と話されていたため，分析対象から除外した．分析対象となった 11 名の来日方法は，9 名がボートピープルとしての来日であり，2 名のみ OPD による来日である．また滞日期間は最長で約 31 年，最短で約 20 年，平均で約 26.3 年である．

インタビューでは，来日から現在に至る間のライフヒストリーと，調査対象となったベトナム難民の「環境」のうち最も肯定的な人間関係が構築できたとインタビュー対象者が考える日本人（「重要な他者」と表記）との出会いから現在に至るまでのかかわりのプロセスを半構造化面接により聴取した．

聴取したデータは，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下 2003）により分析した．

４．研究成果

（1）　「環境」に対する調査の結果

前節（1）で行った調査では，35 の支援事例を聴取することができ，前述の方法でインタビュー内容を処理した結果，ベトナム難民の生活基盤の確保や改善に対する支援，生活で生じる諸アクシデント対処のための支援，そして，環境との関係性の構築を促進したり調整するための支援が行われていることが明らかになった．

以上の結果から，A 小地域では，ベトナム難民に対するサポーティブな環境があると判断した．

（2）　ベトナム難民に対する調査の結果

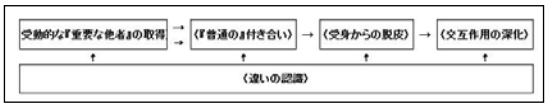
前項の結果を以て，A 小地域に居住するベ

トナム難民に対して前述のインタビュー調査を行ったが，インタビューのデータを分析した結果は次のとおりである．

① 本プロセスの「結果図」と「ストーリーライン」

分析の結果見出された「結果図」は次のとおりである．本項では紙幅の都合上，「結果図」の全体像を提示し，次項以降において，カテゴリー毎に再度詳細な「結果図」とその解説を提示する．

図１　結果図（概略）



本調査・分析の結果，ベトナム難民の「環境」との「かかわり」のプロセスを M-GTA の結果図で表した場合，図１のとおり〈受動的な『重要な他者』の取得〉〈『普通の』付き合い〉〈受身からの脱皮〉〈交互作用の深化〉〈違いの認識〉というカテゴリーが含まれていることが明らかになった．

また「ストーリーライン」の詳細は以下のとおりである．なお，〈　〉はカテゴリー名を，また【　】は概念名を表し，それぞれの定義は次項以降で述べる．

「調査対象となったベトナム難民は，ある人からの紹介など【受動的な出会い】によってある日本人と出会うことになる．それは生活基盤の確立が十分でない中における貴重な日本人との出会いと言える．他の日本人からは差別的な扱いを受ける中，その人とは【差別なき付き合い】ができ，またその人から【不安への被援助】【適応のための被援助】など，日本で生活し続けるための援助を受けることで，その日本人との出会いに対して【『重要な他者』の取得】という意味づけがなされる．『重要な他者』から援助を受け，そしてその人に対してより深い信頼感を持ち，それゆえまた援助などを受けるというループ状の関係が構築される．このように，ベトナム難民は〈受動的な『重要な他者』の取得〉を経験することで，『重要な他者』との付き合いの第一歩を踏み出す．

このように，出会いの当初は援助－被援助という関係だったが，時間の経過によって〈『普通』の付き合い〉も行う．たまには【かかわりの回避】や【日本語での会話困難】によってコミュニケーションが途絶えることもあるが，基本的には上司からの指示に従って動いたり，職場であいさつしたり，会社帰りに自宅に招いたり…と言った，【普段の付き合い】が，〈『普通』の付き合い〉の中心となる．しかし，『普通』と，留保が付されているとおり，この付き合いの背景には，ベトナム人ゆえ，ベトナム難民ゆえ，また外国人ゆえの【ベトナム流の付き合い】【『気遣い』ある付き合い】【『したたか』な付き合い】【立場ゆえの指摘困難】という特徴も指摘される．これらの背景には，前述の援助を受ける立場やその人に対する『重要な他者』との意味づけ経験，そして，自分が日本人とは少し違うという感覚がある．

この【普段の付き合い】は，ベトナム難民が『定住化』を進めていくためには必要なプロセスの一段階ではあるが，この付き合いによって，前述の【立場ゆえの指摘困難】が強化されることもある．

その後も援助を受けることは継続しているものの，滞日生活が続くにつれ，相手からもたらされる【肯定的機会の被供与】や，自身による【被援助経験の捉えなおし】に後押しされる形で【『更なる』独立志向】を持つ．これらのことを背景として，当初受身的な存在だった彼らは〈受身からの脱皮〉を試みる．

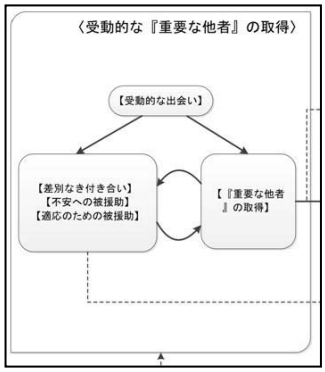
このようなプロセスを経て，彼らはこれまでとは逆に，仕事上などで【相手への働きかけ】を試みたり，援助－被援助の関係から一歩進んで【親近化の感覚取得】に至り，さらには【相互扶助の感覚取得】という，相手との〈交互作用の深化〉の方向に進んでいく．

以上のプロセスを経て彼らの『定住化』は進んでいくが，〈違いの認識〉を持ちながら『重要な他者』と付き合っていると話す．これは，もともと【違いある付き合い】－言葉や考え方などがそもそも日本人とは違う，という前提での付き合い－をしていることに加え，日本人との付き合いにおけるちょっとしたきっかけによって，これらの違いの認識は，強化され，【よそ者感の取得】へと強化されることになる．」

② カテゴリーと概念の説明：〈受動的な『重要な他者』の取得〉カテゴリー

本〈受動的な『重要な他者』の取得〉カテゴリーは，「他の人の力によって受動的に『重要な他者』を取得する」ことを意味し，図 2 のとおり 5 概念から構成される．

図２　結果図（本カテゴリー）

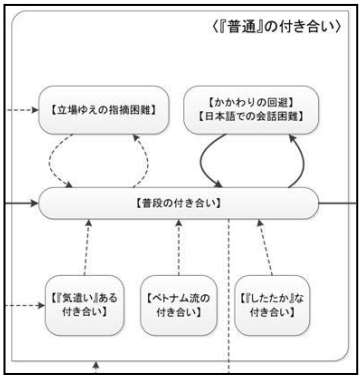


各概念の定義は，次のとおりである．【受動的な出会い】…「他の人の力によって受動的に『重要な他者』と出会い，その後の付き合いが始まること」,【不安への被援助】…「異国での生活にあたって生じる，漠然とした不安に対し,寄り添ってもらうこと」,【差別なき付き合い】…「『ガイジン』や『難民』ではなく，一人の人として尊重されて付き合うこと」,【適応のための被援助】…「地域社会や職場など，彼らの生活の場に適応するための援助を受けること」,【『重要な他者』の取得】…「日本での生活における『重要な他者』を取得すること」.

③ カテゴリーと概念の説明：〈『普通』の付き合い〉カテゴリー

結果図の 2 番目にあたる〈『普通』の付き合い〉カテゴリーは,「ごく日常の付き合い」と定義され,図 3 のとおり【普段の付き合い】を中心とした 7 概念から構成される.

図 3　結果図（本カテゴリー）



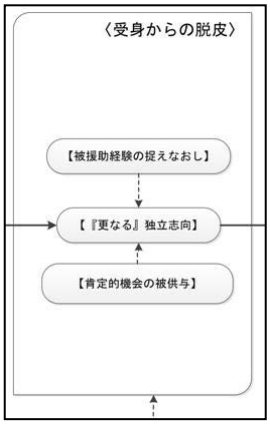
各概念の定義は，次のとおりである．【普段の付き合い】…「普段どおりの付き合いをすること」,【『気遣い』ある付き合い】…「彼ら自身が考える『気遣い』をしながら，相手と付き合うこと」,【『したたか』な付き合い】…「ある目的のために戦略を持って他者と付き合うこと」,【かかわりの回避】…「何らかの衝突により，相手とのかかわりを回避すること」,【日本語での会話困難】…「低い日本語力ゆえに相手との会話に困難が生じ，また会話の困難さから，何らの困難を生じること」,【立場ゆえの指摘困難】…「援助を受ける立場ゆえに，相手に対して物言いができないこと」,【ベトナム流の付き合い】…「日本人に対しても，ベトナム流の方法で相手と付き合うこと」.

④ カテゴリーと概念の説明：〈受身からの脱皮〉カテゴリー

結果図全体の 3 番目に位置する〈受身からの脱皮〉カテゴリーは「より独立した生活を目指す」を意味し，図 4 にある 3 概念から構成される.

本カテゴリーに含まれる概念の定義は，以下のとおりである.【『更なる』独立志向】…「それまで受けた援助を活かしながら，より独立した生活を目指すこと」,【被援助経験の捉えなおし】…「自分が受けた援助の意味を捉えなおすこと」,【肯定的機会の被供与】…「その人の人生にとって肯定的な機会を与えられること」.

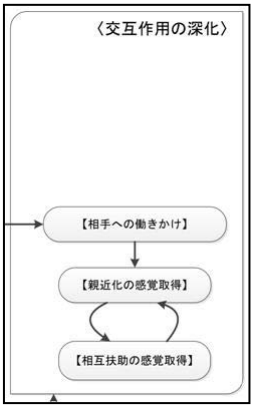
図 4　結果図（本カテゴリー）



⑤ カテゴリーと概念の説明：〈交互作用の深化〉カテゴリー

結果図の中で 4 番目に位置し，一連のプロセスの最後にあたる本カテゴリーは,「『重要な他者』との交互作用関係が深化する状態」を意味し，3 概念から構成される（図 5）.

図 5　結果図（本カテゴリー）



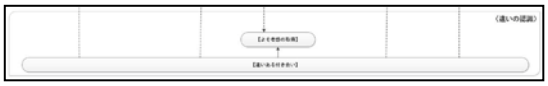
【相手への働きかけ】…「『重要な他者』からではなく，ベトナム難民から『重要な他者』に働きかけること」,【親近化の感覚取得】…「相手と親しくなってきた，との感覚を得ること」,【相互扶助の感覚取得】…「相手と相互に助け合うという関係になった，という感覚を持つこと」.

⑥ カテゴリーと概念の説明：〈違いの認識〉カテゴリー

最後に，〈違いの認識〉カテゴリーを述べる．本カテゴリーは「他者との違いを認識する」と定義される．結果図（図 1）における

位置からわかるとおり，一通過点として存在するものではなく，前述した諸カテゴリー全体に影響を及ぼしている．

図 6　結果図（本カテゴリー）



本カテゴリーは, 図 6 のとおり 2 概念から構成される．【違いある付き合い】…「生活習慣や考え方の違いを認識した上で付き合うこと」,【よそ者感の取得】…「自分がよそ者（外国人・難民）である感覚を持つこと」.

（３）　結論：多文化間における「かかわり」促進のためのソーシャルワーク支援の方法

以上，本研究の目的の 1 つである「ベトナム難民と『環境』との『かかわり』のプロセス」を，インタビューの語りから明らかにした．このプロセスには【適応のための被援助】や【肯定的機会の被供与】などが含まれており，ベトナム難民と「環境」，その中でも特に「重要な他者」との「かかわり」のプロセスは，援助する－援助を受けることで進んでいることが明らかになった．「重要な他者」は，少なくともベトナム難民に対するフォーマルサービスがぜい弱な日本において，援助提供者として重要な役割を担ってきたと指摘できる．

その一方で，社会福祉における援助という視点からこれらの援助を概観すると，「重要な他者」が行ったことは，必ずしも援助とは言えず，カッコ付きの「援助」と表現することが適切である．なぜなら「重要な他者」が提供してきた「援助」には，必ずしも社会福祉的な視点が含まれているとは考え難いためであり，より子細に検討した場合，「援助」が必ずしも「定住化」に寄与せず，場合によってはその反対の方向に作用している可能性が指摘できるからである．

また，その「援助」が日常生活における人間関係の中で行われていたために，ストーリーラインなどに見受けられる【立場ゆえの指摘困難】概念の存在からわかるとおり，ベトナム難民と「重要な他者」との間で上下関係が生じるという課題も生じている．

以上の点を踏まえると，ベトナム難民の近くで，ソーシャルワーカーなど社会福祉における援助観を理解した人によって援助を提供することが必要であると指摘できる．

注

１）合法出国計画（Orderly Departure Program）．国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）とベトナム政府が交わした覚書に基づき，家族の再会などの人道的なケースに限り，ベトナム政府がベトナム人の合法的な出国を認める仕組み．

文献

原口律子（2001）「インドシナ定住難民の社会適応－サポート・システムの分析を基軸として」『共生社会学』1, 1-47.

石河久美子（2003）『異文化間ソーシャルワーク－多文化共生社会をめざす新しい社会福祉実践』川島書店.

川喜田二郎（1967）『発想法－創造性開発のために』中央公論社.

川喜田二郎（1970）『続・発想法－KJ 法の展開と応用』中央公論社.

川上郁雄（2001）『越境する家族－在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店.

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』弘文堂.

荻野剛史（2006）「わが国における難民受入れと公的支援の変遷」『社会福祉学』46(3), 3-15.

武田　丈（1997）「異文化適応のためのグループワーク」『ソーシャルワーク研究』22(4), 275-82.

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

荻野剛史（2012）「『ベトナム難民』の「定住化」プロセス」（日本社会福祉学会第 60 回秋季大会）.

６．研究組織

(1)研究代表者

荻野　剛史（OGINO TAKAHITO）

愛知みずほ大学・人間科学部・講師

研究者番号：00410861